

たくさんの架け橋を目指して

智辯学園奈良カレッジ中学部 3年 谷本 遼太

日本で「アイバンク」のことを知っている人はどれくらいいるでしょうか。アイバンクとは、角膜移植を必要としている人と、亡くなった後に角膜を提供する人の架け橋となる機関です。アメリカで働いている眼科医の叔父から、日本とアメリカの献眼についての違いを聞いて以来、僕は臓器提供のことをもっと知らなければならないと思うようになりました。

アメリカの移植眼数が年間五万件に対し、日本は五十分の一である、わずか約千件にしか及びません。どうしてこんなにも差があるのか。移植を待っている人は年間約五千人もいる中で、日本はどうしてこんなにも献眼する人が少ないのか。これは献眼に限ったことでなく、臓器提供すべてに言えることです。ここには、アメリカと日本の臓器提供におけるシステムの違いが大きく関係しているといえます。日本ではドナーというのは登録制で待機状態にあります。本人が生前登録していても、その人の死後、ドナーを確認するしっかりとした手続きはないのです。周りの家族も、本人が生前登録していたことを知らなかったというケースもたくさんあるようです。生前登録をしていても、それに気づいてもらえないのは、その人の意思を無駄にしてしまうことにもなります。

それに対してアメリカでは、ドネーションをするかどうかを確認する「コーディネーター」と呼ばれる人達がいます。入院時には、ドナーの確認があり、死亡した際には必ずこのコーディネーターが家族に話をしに行くことになっています。コーディネーターが臓器提供の意思について、生前の本人と家族の希望を必ず確認することが州法で義務づけられているのです。

アメリカと日本の差には、このようなシステムの違いもあるかもしれませんが、僕は、日本のドナーの低さには、システム作りがしづらい倫理的な問題も大きく関係しているのではないかと考えます。身近な人の死に直面し悲しみにくれている時に、ドナーの話をするのは、残された家族にとって大変苦しいことです。大事な人の死が他の人の役に立てるかもしれないという気持ちと、大事な人の死を目の前にして不謹慎ではないかという気持ちのジレンマに、誰もが心を痛めると思います。

この問題をどのように乗り越えていけるかが、とても難しいのではないのでしょうか。どちらが正しくてどちらが正しくないとは決して言えない問題であり、臓器提供を絶対しなければならないと決めつけることはできません。しかし、ドナーのおかげで救われる人がたくさんいるということを僕たちがもっと知ること、ドナーに対してもっと積極的で肯定的な見方ができるようになるのではないのでしょうか。また、愛する人の死という信じがたい状況に置かれた人は、冷静ではいられないため、生前本人がドナー登録をしたことを思い出すことができないというのも、提供の機会を逃してしまう原因となっているのだと思います。

僕たちがまず始めるべきことは、一、臓器提供について関心を持つこと。二、具体的な数値で現状を知り、ドナーによって救われる人がどれくらいいるかを知ること。三、普段から家族や周りの人とドナーについて話し合う機会を持つこと。四、ドナーについての否定的な偏見を無くすこと、だと思っています。そして、学校教育現場で臓器移植についての授業を行ったり、テレビやインターネットでの啓発活動などの体制づくりも重要だと思います。叔父の話から、角膜は、心臓・肺・肝臓など脳死のみ移植可能な臓器と異なり、脳死でも心臓死でも移植可能な臓器であることを知りました。このような知識を増やすことも、ドナーへの関心につながるのではないのでしょうか。

このように一人でも多くの方が、献眼や臓器移植についての意識を高めることが大事だと思います。

そしてアメリカのように、臓器提供をするかしないかに関わらず、ドネーションを確認する制度を日本も取り入れることで、日本の臓器提供者がもっともっと増えることを僕は願います。ドナーをする人と受け取る人との光の架け橋を、たくさん作ることでできる世の中になりますように。